

令和三年四月十日発行
皇學館論叢第五十四卷第一号 抜刷

書評

深草 正博 著 『ラジオで語った日本の社会と文化』

—— FM三重・(司会進行) 富田哲也アナウンサー

「フォーカス・オン・ジャパン」より——

内 海 勝 也

書評

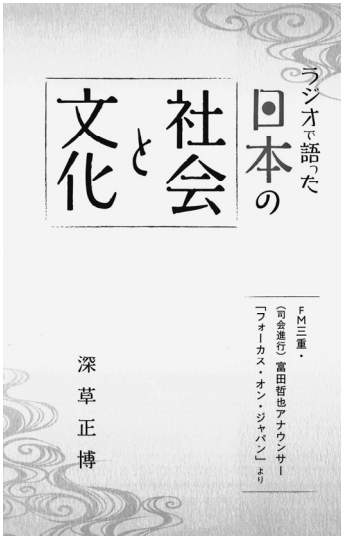
深草 正博 著 『ラジオで語った日本の社会と文化』

—— F M 三重・(司会進行) 富田哲也アナウンサー

『フォーカス・オン・ジャパン』より——』

内 海 勝 也

皇學館論叢 第五十四卷第一号
令和三年四月十日



「七夕とカルピス」。このような意外な言葉の取り合わせは、評者が大学生の頃に受講した、著者深草正博氏の講義ではなぜか印象に残っている。それは「常識を覆す」ことをモットーに講義を行っていた著者だからこそ、受講生の印象に残ったのではないだろうか。

そんな著者の最新作が本書である。本書の性格は大きく二点ある。すなわち、一点目は日本人なら知っておきたい教養書という性格である。著者の長年の読書量(二〇一八年十月二二八九冊達成)に基づいた「知の宝庫」であるとも言える。

二点目はグローバルな視点で書かれた深草理論入門の書であるという性格である。著者はフランス史の専門家（後の十六を見よ）でありながらも、日本をみる視点を併せ持つ。つまり、世界を見つめ、日本を見つめ、郷土を見つめる。そんな視点が盛り込まれているのである。

二

さて、本書は、平成三〇年四月二日から三十一年三月二五日まで、FM三重で毎週放送された「フォーカス・オン・ジャパン」に出演された、著者の五二回分の記録である。

本書は二部構成である。一部は著者の作った原稿をもとに構成されている。二部は、放送をそのまま活字にして、アナウンサーの富田哲也氏と深草氏の対話形式を取っている。もともと著者は、放送を書籍にする意向はなかった。また、時流をもとにラジオで語る半年の契約であった。そのため、放送記録は三ヶ月分しか残っていないとのことであった。すなわち、第一部（四月二日～十二月二四日まで）は、著者の作った原稿に基づいて文章にしたものである。第二部（二月三十一日～翌三月二五日まで）は、著者のゼミ生も協力し、残っている三ヶ月分の放送記録をそのまま活字にしている。

本書は、日本の社会と文化を、一般の人にどれだけわかりやすく伝えることができてきているのかという、著者の苦心が読み取れる。そのため、ラジオで一般に向けて話されているので、平易な文章で読みやすい。なおかつ、専門的でもある。また、参考文献も紹介されており、教養書と専門書の中間とでもいえる性格を持っている。

本書は、ラジオで放送された内容ごとに目次立てされている。まず、目次からテーマのみを列挙する。

- 一、自己紹介
- 二、サクラについて
- 三、黄砂と酸性雨
- 四、地方について考える
- 五、五月五日「こどもの日」とは
- 六、茶と健康
- 七、「犬公方」と歴史の見方
- 八、日本の元号と世界の暦
- 九、五月三〇日・ごみゼロに向けて
- 一〇、虫歯予防の日に
- 十一、中国留学生の見た日本
- 十二、入梅とつゆ入り

- 十三、森と文明
 - 十四、アメリカの独立とコーヒー
 - 十五、「七夕」をなぜ「タナバタ」と読めるのか
 - 十六、「フランス革命記念日」について
 - 十七、なぜ土用にウナギを食べるのか
 - 十八、JulyとAugust
 - 十九、原爆について考える
 - 二十、甲子園と後樂園
 - 二十一、ワインの歴史―ワインの日になんで―
 - 二十二、September―九月の由来―
 - 二十三、「重陽の節供」とは
 - 二十四、月と暦
 - 二十五、地震と歴史
 - 二十六、曜日の由来
 - 二十七、読書の秋
 - 二十八、十日夜と亥の子
 - 二十九、コロンブスのアメリカ大陸「発見」について
 - 三十、ノーベル賞の発想
 - ―本庶佑さんノーベル賞受賞にことよせて―
 - 三十一、病氣と世界史―風疹の流行を前にして―
 - 三十二、二四節氣と七十二候
-
- 三三、七五三について
 - 三四、リンカーンの「ゲティスバーグ演説」
 - 三五、勤労感謝の日を考える
 - 三六、明治維新を考える―文明開化の評価―
 - 三七、「世界人権宣言」を考える―七〇周年を記念として―
 - 三八、外国人技能実習生死亡の背景
 - ―日本人の深層心理にせまる―
 - 三九、クリスマスについて
 - 四〇、除夜の鐘とは
 - 四一、正月を考える
 - 四二、成人の日と小正月
 - 四三、三重県について―県民性の研究から―
 - 四四、四四〇年前にヨーロッパ人が見た日本
 - ―ヴァリニア―ニとフロイス―
 - 四五、節分と恵方巻
 - 四六、「建国記念の日」について
 - 四七、「ヴァレンタインデー」と「涅槃会」について
 - 四八、二月という月について
 - 四九、「ひな祭り」とは
 - 五〇、過去二〇〇〇年の三大危機
 - 五一、春分・秋分と彼岸

五二、歴史の見方・考え方

読者はこの中でいくつ知っていることがあり、またどれだけ語ることができるだろうか。つね日頃、著者が述べているように「常識となっているものにメスを入れる」のが本書の役割でもある。言い換えれば、本書そのものが固定観念を崩すことをテーマにしている。すなわち、すべての項目において、当たり前とされている内容からはじまり、そして現代の話題から歴史を眺めつつ、最後は意外な事実を提示してくれる。このことによつて、読者自身が自らの中に創造性を養うことも、本書の役割でもある。

ところで、五二の多岐にわたる話題を評者なりに八つのテーマに分類した。

- (一) 環境 (二) 日本の文化と歴史 (三) 食、(四) 年中行事
- (五) 世界の文化と歴史 (六) 暦 (七) 創造性 (八) 語源

五二の話題がどのテーマにあたるか、考えながら読んでみていただきたい。

三

著者はこれまで四冊の単著を出されている。

『社会科教育の国際化課題』国書刊行会、平成七年

『環境世界史序説』国書刊行会、平成一三年

『「文化と環境」の教育論』皇學館大学出版部、平成二二年

『グローバル世界史と環境世界史』青山社、平成二八年

いずれも骨太の研究書である。この四冊で展開された理論のエッセンスが本書ではいたるところに散りばめられている。そこで、あらためて深草正博氏が訴えているもの、すなわち深草理論とは一体何かを考えてみることにする。

著者の主張を評者なりに要約すると、「文化相対主義の立場から物事を捉える」である。著者は環境問題や進歩史観の克服の観点から約三〇年にわたり、ヨーロッパ中心史観からの脱却を訴え続けている。その問題意識の中で著者が生み出したのが、「タテの異文化」「ヨコの異文化」「啓蒙的偏見」などの概念である。

そこで、本書から読み取ることができる深草理論を評者なり

に七つに分類することにする。①文化相対主義を根本とする理論、②環境世界史学、③「啓蒙的偏見」、④「温新知故」の認識構造論、⑤クリエイティブ理論、⑥「ふるさと」の見直し、⑦「ヨコの異文化」「タテの異文化」、である。本書をもとに、以上の七つを簡略に説明すれば以下のごとくになる。

①文化相対主義を根本とする理論「外国人技能実習生死亡の背景」(二二八)

「文化相対主義」とは、すべての文化に優劣をつけられず、それぞれの文化は異質だけでも、価値は等しいというものである。この考え方を根本にすれば、偏見や差別はなくなるという。この理論を根本に据え、著者は様々な視点を読者に提供する。例えば、福沢諭吉の『文明論之概略』を引き合いに出し、彼の説く「野蛮」↓「半開」↓「文明」を進歩としてみるのではなく、文化人類学で提唱される「文化相対主義」の立場に立ち、それぞれを異文化としてみる視点を説く。

②環境世界史学「森と文明」(二二三)

著者は、安田喜憲氏の影響を受けて「環境世界史学」を提唱している。すなわち、世界史を環境の視点から捉えなおすのである。

森と文明では、森の消失の現状を読み解き、自然破壊の淵源をキリスト教に、その精神を古代ギリシャ・ローマに求めている。特に地中海で栽培されるオリブやブドウ、イチジク。これらは、一万年前の大規模な森林破壊があり、ナラなどの森が失われ、そして、長年の耕作で土地が疲弊し、劣悪化した土壌においても、十分に育つものとして栽培されたという事実は評者にとって驚きであった。

③啓蒙的偏見「コロンプスのアメリカ大陸「発見」について」(二一九)

著者の大きな課題意識は「ヨーロッパ中心史観」の克服と、非ヨーロッパ地域の復権である。著者は「進歩」「合理性」「科学性」「理性」などは一八世紀ヨーロッパの啓蒙思想にその源を求めることができるのではないかと、そして、そのような一つの見方にとらわれることを「偏見」と呼ぶなら、啓蒙思想的観点を、「啓蒙的偏見」と名づけることによって、歴史の進歩的見方のみならず、合理的、理性的捉え方をも含めて、そうした見方の特徴ともいべきものをより包括的に取り扱うことができるのではないかと、としている(『社会科教育の国際化課題』第三章)。

本書ではコロンプスを「侵略者」と見る視点、大航海時代に

始まる西欧の世界侵略によって、本来そこにあった地名が無視されて、西欧的価値観によって自分勝手な名がつけられたことなどの例を紹介している。

④ 「温新知故」の認識構造「犬公方」と歴史の見方」(七)

「温新知故」(「論語」という言葉がある。「故きを温ね新しきを知る」、すなわち、古い物事を調べて、そこから新しい知識や見解を引き出すことである。しかし、今はこの逆の認識が求められているのではないか、という著者の問題意識から創り出された概念が、「温新知故」である。つまり、「温故知新」をひっくり返したのである。

「温新知故」とは、現実には絶え間なく生起する問題を考察することによって「温新」、そこから得られた枠組み(フレームワーク)によって、過去を見る(「知故」という方法である。その観点から、「天下の悪法」と評価されてきた犬公方・徳川綱吉の「生類憐れみの令」を考えてみる。つまり、現在の動物保護の観点から見ると、これまでと逆の評価がなされるのである。

⑤ クリエイティブ理論「ノーベル賞の発想」(三〇)

教育者はクリエイティブでありたい。また、子どもたちにもクリエイティブになってもらいたい。本書では、ノーベル賞受

賞者のクリエイティブ理論を紹介している。例えば、二〇一二年の細胞の研究でノーベル賞を取った山中伸弥氏の小学生の質問に答えた内容が、評者には非常に興味深い。それは、①常識にとらわれない、②教科書をうのみにしない、③先生の言うことを聞くことはとても大切だけど、時には疑うことも大切である、ということである。換言すると、クリエイティブになるためには、①「前提」を問うこと、②「当たり前」を問うこと、③「意味」を問うこと、とも言えるのではないだろうか。紹介されるエピソードはともわかりやすく、読者の関心をそそる。

⑥ 「ふるさと」の見直し「地方について考える」(四)

地方を脅かす危機は、人口減少とグローバル化の進展であると著者はいう。特にグローバル化は地方の経済や社会を根底から揺さぶり、地方のアイデンティティの喪失を招いてしまった。また、若者の自己肯定感が低い現状も本節で紹介されている。そこで、著者は地方の危機を救い、若者の自己肯定感を高める方策として、「ふるさと」を見直すことを提案している。まず、著者はふるさとを「同じ言葉(方言)の通じる範囲」と再定義を行う。そして、グローバル化によって、地方の文化が改めて見直されることになったのではないか、という。つまり、地方を「ふるさと」として捉え直す動きが、グローバル化とともに

始まったのである。これからのふるさとを考える際に重要な言葉として「地球的規模で考えつつも、行動は地元から」という「Think globally, act locally」を著者は紹介する。ふるさとに思いを馳せることが、地方を救う一助になるといっているのである。

⑦「ヨコの異文化」「タテの異文化」「歴史の見方・考え方」(五二)

異文化理解の基本は、いかなる地域にも存在する文化も、かけがえないものと考えることにある。そう考えると、横の関係、例えば日本人はご飯を食べるときに箸を使う、韓国ではご飯を食べるときにはさじを使う、というような違いがある。同時代の横の関係を「ヨコの異文化」と著者は名付けている。他方、歴史的に、時代がタテに積み重なっている部分を、それぞれ時代ごとの「タテの異文化」と名付けている。そうすると、それぞれの時代がそれぞれの生き方をしていて、現在から見えて劣っている、というふうに見えることなく、異文化として捉えることができる。そして、そこからまた新たなものを見直すことができ、学ぶことができるのである。

本書では日本・世界の文化や歴史を中心とした多岐にわたる分野を扱っている。それは著者が生粋の読書家であるからである。著者の研究室に足を踏み入れたものは驚愕する。氏の研究

室は机以外本なのである。(誇張表現と思う方は直接足を運んでいただきたい。)著者は学生時代より週に一冊を目標に読書を行っている。(「読書の秋」二七)また、著者は長年にわたり、明治維新を中心とした文明論について研究を続けている。福沢諭吉、中江兆民、夏目漱石を対比しながら現代世界の進むべき方向性を示唆している「明治維新を考える」(三二)。

深草正博氏の講義を一度でも聞いたことがある人には、ぜひとも手にとってほしい一冊である。すなわち、本書は、深草理論入門書であり、総決算でもある。ぜひ一読を進めたい。

(うつみ かつや・兵庫教育大学附属小学校)

皇學館大学教育学研究科教育学専攻修士課程)